1　東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和6年2月)

野菜振興部　調査情報部

【要約】

●東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万7559トン、前年同月比103.2%、価格は1キログラム当たり265円、同100.1%となった。
●大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は３万4306トン、前年同月比96.8%、価格は１キログラム当たり231円、同101.3%となった。
●４月は、２月の悪天候の影響などにより全国的な出回り不足が予想される。

（1）気象概況

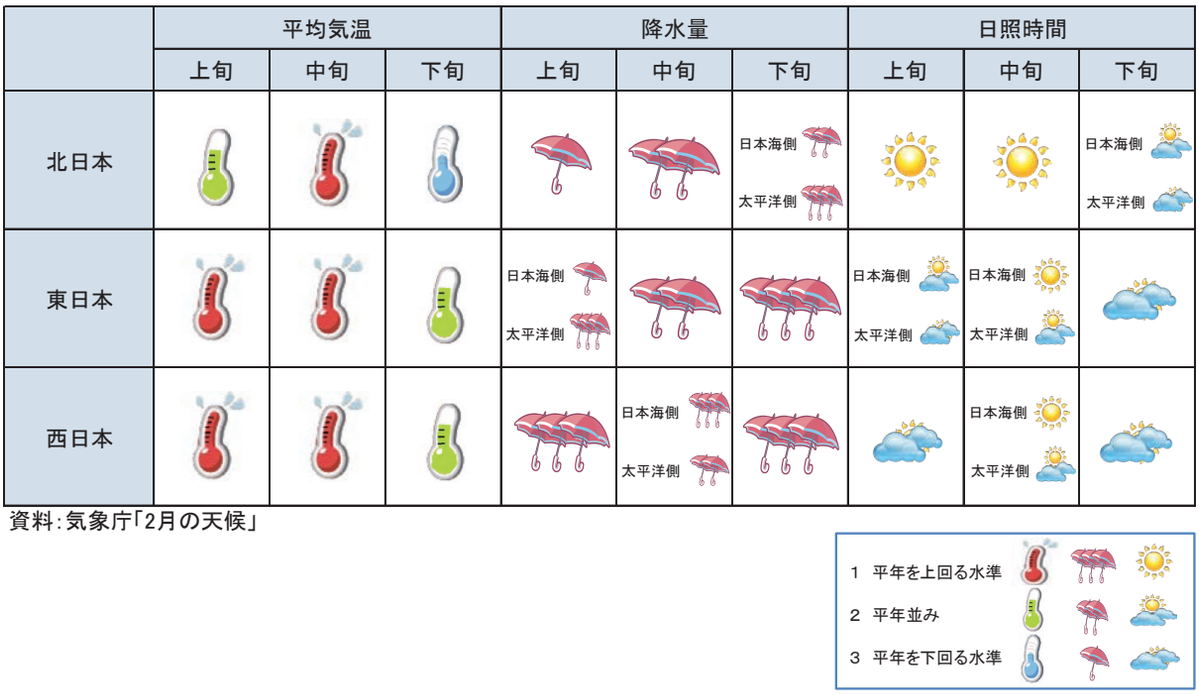
上旬は、期間の中頃にかけて低気圧や前線の影響を受けやすかった東・西日本と沖縄・奄美では、曇雨天日や降雪日が多かった。５日から６日にかけては、東・西日本太平洋側沿岸付近を低気圧が発達して東進したため、東・西日本を中心にまとまった雨や雪が降り、東日本太平洋側を中心に平地でも大雪となった。このため、旬降水量は、西日本でかなり多く、東日本太平洋側で多かった。旬間日照時間は、西日本太平洋側でかなり少なく、東日本太平洋側、西日本日本海側で少なかった。東日本日本海側では平年並だった。また、期間を通して冬型の気圧配置が弱く、低気圧の影響が小さかったため、旬降水量は北日本と東日本日本海側で少なく、旬間日照時間は、北日本で多かった。寒気の影響が弱く、暖かい空気が流れ込んだため、旬平均気温は、西日本と沖縄・奄美でかなり高く、東日本で高かった。北日本では平年並だった。

中旬は、冬型の気圧配置が弱く、全国的に寒気の影響を受けにくかった。また、移動性の高気圧により日本の南から暖かい空気に覆われた時期や、南から暖かい空気が流れ込んだ時期があった。このため、旬平均気温は全国的にかなり高く、特に、北日本、東日本と西日本ではそれぞれ平年差＋4.8℃、＋5.2℃、＋4.3℃で、1946年の統計開始以降１位となった。また、旬間日照時間は、北日本、東日本日本海側でかなり多く、西日本日本海側で多かった。東日本太平洋側、西日本太平洋側では平年並だった。旬平均気温は、北日本、東日本、西日本、沖縄・奄美ではかなり高かった。旬降水量は、西日本日本海側で多く、北日本、東日本、西日本太平洋側で平年並だった。

下旬は、シベリア高気圧が北から張り出す一方、本州の南岸には低気圧や前線が形成されやすかった。このため、北日本では寒気の影響を受けやすかった一方、東・西日本では、短い周期で低気圧や前線の影響を受け、北・東日本太平洋側では雪が降った所もあった。26日から27日にかけては、日本の東で発達した低気圧の影響で、北日本太平洋側で大雪となった所があった。これらのことから、旬降水量は、北日本太平洋側と東日本、西日本でかなり多く、北日本日本海側と沖縄・奄美で平年並だった。旬間日照時間は、東日本日本海側、西日本でかなり少なく、北・東日本太平洋側で少なかった。北日本日本海側と沖縄・奄美で平年並だった。旬平均気温は、期間前半に暖かい空気に覆われやすかった沖縄・奄美で高く、北日本で低かった。東日本、西日本では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図１）。

図１　気象概況



資料：気象庁「2月の天候」

（2）東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万7559トン、前年同月比103.2%、価格は1キログラム当たり265円、同100.1%となった（表１）。

表１　東京都中央卸売市場の動向（２月速報）

品　目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	107,559	103.2	96.0	265	100.1	110.2	260	267	270
だいこん	8,462	97.5	88.2	91	90.2	105.1	98	87	85
にんじん	5,499	92.4	93.1	136	108.3	116.0	124	142	149
はくさい	10,668	95.3	87.4	67	106.6	144.3	61	61	86
キャベツ類	14,186	98.4	90.7	82	86.1	103.6	78	85	83
ほうれんそう	1,659	111.5	106.0	427	85.2	97.4	451	439	387
ねぎ	4,087	92.1	98.6	340	134.4	113.1	344	327	351
レタス類	6,723	112.8	102.1	201	77.2	94.6	220	210	172
きゅうり	4,045	98.8	91.1	497	110.8	119.6	526	494	469
なす	1,437	101.3	96.9	494	102.1	101.3	510	496	471
トマト	4,897	109.1	100.7	377	94.1	100.4	370	373	390
ピーマン	1,588	112.6	113.2	767	93.0	99.0	766	766	769
さといも	399	85.5	81.4	396	122.5	123.5	384	397	409
ばれいしょ	7,560	108.7	107.1	138	90.5	85.7	136	145	132
たまねぎ	8,695	93.2	90.5	186	135.9	139.8	194	187	174

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」
注１：平年比は過去５カ年平均との比較。
注２：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの９市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、ピークを迎えた中旬以降に上がり、前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った（図２）。

葉茎菜類は、ねぎの価格が、予想より入荷量が増加しなかったため堅調な動きが続き、前年を３割以上上回り、平年を１割以上上回った（図３）。

果菜類は、きゅうりの価格が、高めに推移した前年を１割強上回り、平年を２割近く上回った（図４）。

土物類は、たまねぎの価格が、数量不足から堅調な推移となり、下旬に向け落ち着きに向かったものの、前年を３割以上上回り、平年を４割近く上回った（図５）。

なお、品目別の詳細については表２の通り。

図２　にんじんの入荷量と卸売価格の推移

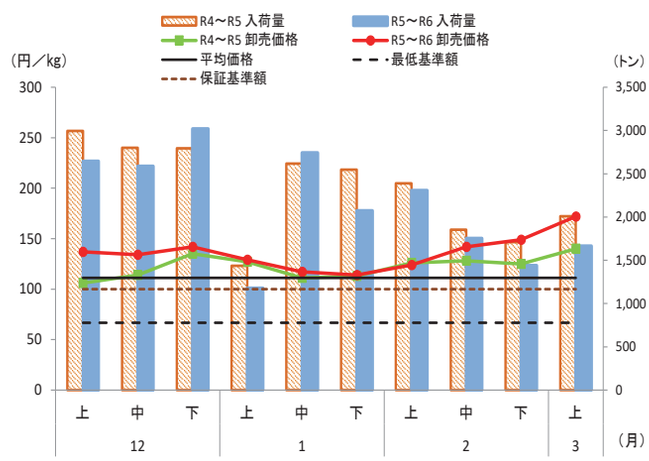


図３　ねぎの入荷量と卸売価格の推移

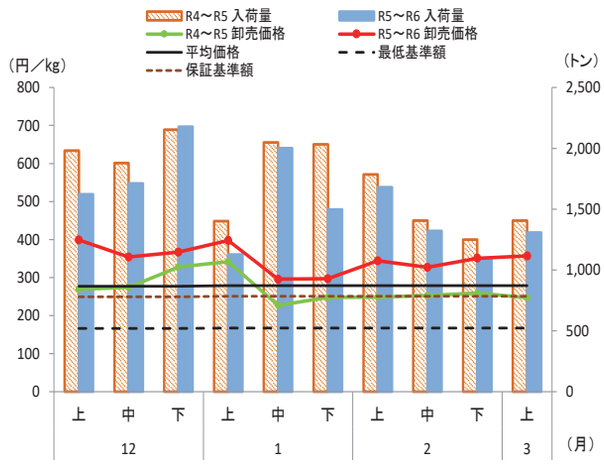


図４　きゅうりの入荷量と卸売価格の推移

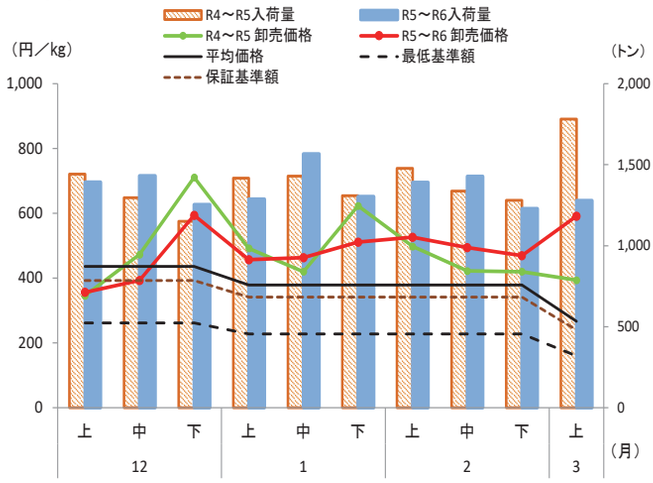
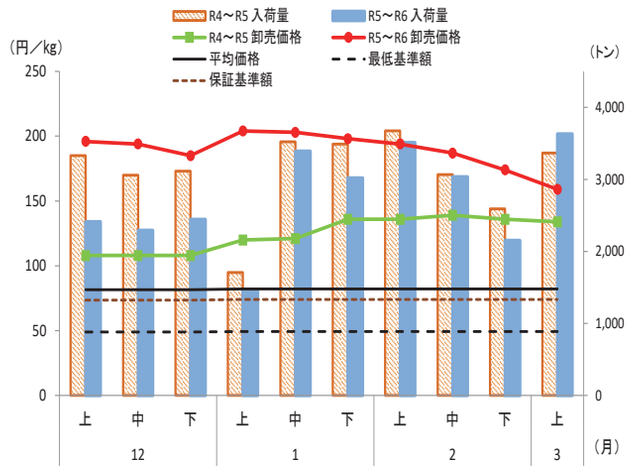


図５　たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

※１　卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

※２　平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。

※３　事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表２　品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	2月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	神奈川産、千葉産中心の入荷があった。神奈川産の作付面積は前年を並みで、栽培期間中、概して気温は高めに推移し、日照にも恵まれた。全体的に降水量が少なく、干ばつ傾向となった。やや前進傾向だった出荷は平年並みに戻っている。千葉産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれて生育は順調で、やや前進傾向となった。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割以上下回った。 価格は、中旬以降やや落ち着いたものの、前年を1割弱下回り、平年をやや上回った。
	にんじん	千葉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、暖冬の影響により切り上がりが遅く、収穫は順調に進んでいる。中国産の輸入が前年の3倍近くとなっている。総入荷量は前年、平年ともかなりの程度下回った。 価格は、ピークを迎えた中旬以降に上がり、前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。
葉茎菜類	はくさい	茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、11月の温暖な気候により生育が促進され、やや前進傾向となった。秋冬作の切り上がりが早まっている。兵庫産についても出荷は7～10日ほど早い。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。 価格は、入荷量の減少に向かった下旬に上がり、やや安めに推移した前年をかなりの程度上回り、平年を4割以上上回った。
	キャベツ類	愛知産を中心に千葉産などの入荷があった。愛知産の作付面積は前年並みで、温暖な気候からやや干ばつ傾向ながら生育は順調であった。10～14日程度前進し大玉傾向となった。千葉産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育は前進傾向となった。総入荷量はやや少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割近く下回った。 価格は、値ごろ感が出た中旬以降底上げに転じたものの、前年を1割以上下回り、平年をやや上回った。
	ほうれんそう	茨城産、群馬産中心の入荷となった。茨城産の作付面積は前年をやや上回り、気温が高く生育は促進し、全体的に前進傾向となった。群馬産の作付面積は前年並みで、露地作が前進しているため切り上がりが早かった。気温高により生育は順調だが、病害は少ないものの虫害が散見された。総入荷量は前年を1割以上上回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は潤沢な出回りから苦戦が続き、やや高めに推移した前年を1割以上下回り、平年をわずかに下回った。
	ねぎ	千葉産を中心に埼玉産、茨城産など関東産の秋冬作の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、遅れ気味であった生育は昨年内の天候に恵まれて回復した。寒さによる葉の傷みも少なく、平年並みまで回復した。埼玉産の作付面積は前年並みで、収穫も順調に進んでいる。茨城産の作付面積は前年を下回り、好天に恵まれ遅れていた生育は回復傾向となった。全体的に太りも回復しているが、正品率はやや低下している。総入荷量は多かった前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。 価格は、予想より入荷量が増加しなかったため堅調な動きが続き、前年を3割以上上回り、平年を1割以上上回った。
	レタス類	静岡産、茨城産を中心に香川産、長崎産などの入荷があった。静岡産の作付面積は前年並みで、気温が高く、定期的な降雨により圃場（ほじょう）間格差はあるものの、生育は順調で7～10日ほど前進となった。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、12月の温暖な気候により生育は前進した。香川産の作付面積は前年並みで、温暖な気候と降雨もあり、生育は順調となった。虫害がやや散見された。長崎産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ一部病害が散見されるものの、生育は概ね順調となった。総入荷量は少なめに推移した前年を1割以上上回り、平年をわずかに上回った。 価格は、高めに推移した前年を2割以上下回り、平年をやや下回った。

果菜類	きゅうり	宮崎産を中心に、群馬産、千葉産などの入荷があった。宮崎産の作付けは前年並みで、天候に恵まれ生育はおおむね順調であった。一部病虫害の発生、草勢の低下が散見された。群馬産の作付面積は前年並みで、生育は前進傾向も、やや草勢が弱く、一部圃場で軟弱徒長気味の株が散見された。千葉産の作付面積は前年並みで、日照に恵まれ生育はおおむね順調であるが、一部圃場で病害が散見された。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割近く下回った。 価格は、高めに推移した前年を1割強上回り、平年を2割近く上回った。
	なす	高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、日照に恵まれて生育は順調で、やや進んでいたが、1月中旬以降の曇雨天や気温の低下により平年並みに戻っている。総入荷量はやや少なかった前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。 価格は、前年、平年ともわずかに上回った。
	トマト	熊本産を中心に栃木産、愛知産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育はおおむね順調となった。病害の発生も平年並みであり、大きな影響はみられない。栃木産の作付面積は前年並みで、越冬作の生育はおおむね順調であったが、成り疲れと気温の低下、日照の減少に伴い圃場により草勢の弱い株が散見された。促成物の生育は順調であった。愛知産の作付面積は前年並みで、温暖な気候の影響により生育はおおむね順調となった。一部病虫害が散見された。総入荷量は少なめに推移した前年を1割近く上回り、平年をわずかに上回った。 価格は厳寒期を超えた下旬に向けやや上向きになり、やや高めに推移した前年を下回り、平年をわずかに上回った。
	ピーマン	宮崎産を中心に、茨城産、鹿児島産、高知産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、一部病虫害、生理障害が散見された。茨城産の作付面積は前年並みで、生育は順調だが病害の発生が散見された。鹿児島産の作付面積は前年並みで、高温の影響により一部立ち枯れや花落ちが散見されたが、概して順調であった。高知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であったが2月の悪天候により樹勢の低下が散見された。虫害も散見されている。総入荷量は、前年、平年ともかなり大きく上回った。 価格は、月間を通して大きな動きはなく、やや高めに推移した前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。
土物類	さといも	埼玉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了している。夏場の高温・干ばつの影響により年明け以降の残量はやや少ない。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割近く下回った。 数量減少に伴い徐々に価格を上げ、前年、平年とも2割以上上回った。
	ばれいしょ	北海道産を中心に鹿児島産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫は終了している。発芽が懸念されるため、選果効率が低下しており、残量はやや多い。鹿児島産の作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響により植え付け遅れや初期生育不良が散見されたものの、その後の天候に恵まれ肥大し、回復傾向となった。総入荷量は前年、平年ともかなりの程度上回った。 価格は堅調な動きとなったものの、過去2年の高めの推移により、前年を1割弱下回り、平年を1割以上下回った。
	たまねぎ	北海道産を中心に静岡産の入荷となった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫は終了している。夏場の高温の影響により作柄が悪く、小玉傾向となった。貯蔵量も少ない。静岡産の作付面積は前年並みで、定植後の温暖な気候と適度な降雨に恵まれたことにより、生育は順調で大玉傾向となった。前進出荷のため、ピークはやや早い。中国産の輸入は前年の2.7倍となっている。総入荷量はやや少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を1割弱下回った。 価格は、数量不足から堅調な推移となり、下旬に向け落ち着きに向かったものの、前年を3割以上上回り、平年を4割近く上回った。

（執筆者：東京シティ青果株式会社　平田　実）

（3）大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は３万4306トン、前年同月比96.8%、価格は１キログラム当たり231円、同101.3%となった（表３）。

品目別の詳細については表４の通り。

表３　大阪市中央卸売市場の動向（２月速報）

品　目	入荷量（t）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	34,306	96.8	94.7	231	101.3	109.1	227	234	232
だいこん	2,718	94.2	91.6	79	101.3	113.1	82	77	76
にんじん	2,219	100.4	98.6	118	95.9	112.6	112	118	128
はくさい	4,105	89.4	93.0	69	93.2	121.5	70	68	71
キャベツ類	4,411	91.9	91.8	76	85.4	103.2	75	79	72
ほうれんそう	520	111.6	89.1	417	81.4	96.5	441	406	397
ねぎ	877	84.9	90.3	438	113.8	115.7	451	426	431
レタス類	1,053	119.3	97.8	186	65.7	91.6	211	184	163
きゅうり	996	95.3	95.5	475	112.3	119.4	516	468	433
なす	451	99.1	107.9	468	103.8	104.7	493	464	447
トマト	1,384	99.6	103.8	359	97.6	101.3	353	352	373
ピーマン	348	125.6	117.8	793	98.5	106.3	750	820	815
さといも	92	84.0	91.2	397	131.9	135.7	384	415	394
ばれいしょ	3,066	97.1	110.7	129	97.0	80.1	125	135	128
たまねぎ	4,633	85.1	93.8	167	133.6	136.3	174	169	152

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年比は過去5カ年平均との比較。
注２：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表４　品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	2月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	鹿児島産を中心に、徳島産や長崎産、和歌山産、香川産も主体となる入荷であった。九州産地は悪天候の日が多く、作業ができない日が続いたため、産地出荷量が少なく入荷が減少した。四国産や和歌山産は、暖冬の影響により作が早まり、前倒しとなったことで旬を追うごとに入荷が減少した。全体でも旬を追うごとに減少傾向となり、月間では前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。 入荷量が伸びない中でも、気温高が続いたことと悪天候の日が多かったことにより量販店の客足も悪く、消費が鈍かったため価格は伸び悩み、旬を追うごとに下落傾向となった。月間では安値だった前年をわずかに上回り、平年をかなり大きく上回った。
	にんじん	鹿児島産が中心となる入荷で、長崎産や鳥取産などの入荷もあった。暖冬の影響により鹿児島産の切り上がりが例年よりも早く、下旬に入荷が減少した。長崎産や鳥取産は潤沢な入荷を続け、月間では前年を大幅に上回った。全体では前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。 価格は、下旬の入荷減少に伴い上伸し、月間全体では高値だった前年をやや下回り、平年をかなり大きく上回った。

葉茎菜類	はくさい	秋冬産地の茨城産と愛知産、後続の九州の各産地などの入荷が主体となった。秋冬産地は暖冬の影響で前月から続いている前進出荷により産地残量が少なく、旬を追うごとに入荷が減少した。茨城産は前年の半分以下、愛知産や兵庫産も前年をかなり下回る入荷量となった。後続の産地は中旬以降に潤沢なスタートとなったが、作付け減少により産地出荷量自体が少なく、入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年、平年ともかなりの程度下回った。 気温が高い日が多かったことに加え、降雨が続いたため量販店への客足が遠のいたことにより売れ行きは悪く、価格は伸び悩んだ。月間では前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に上回った。
	キャベツ類	寒玉キャベツ、春キャベツともに愛知産が中心となる入荷であった。寒玉キャベツは大阪産や福岡産など、春キャベツは兵庫産や和歌山産などの入荷もあった。双方とも暖冬の影響により前進出荷となり、例年に比べると2週間程度早い展開となった。下旬は悪天候となる日が多く、降雨続きで収穫作業が進まず産地出荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年、平年ともかなりの程度下回った。 降雨続きで量販店の客足が悪く、販売には苦戦した。入荷量が伸びない中でも価格は伸び悩み、全旬を通じて安値推移となった。月間では前年をかなり大きく下回り、平年をやや上回った。
	ほうれんそう	徳島産と福岡産が主体となる入荷であった。降雨の日が多い中でも気温高も続いたため生育は順調であったが、量販店の客足が悪く、販売には苦戦し引き合いが弱かったため積極的な集荷ができずに入荷量も伸び悩んだ。月間の入荷量は寒波により少なかった前年をかなり大きく上回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は、引き合いが弱いことから旬を追うごとに下落を続け安値推移となった。月間では前年を大幅に下回り、平年をやや下回った。
	ねぎ（白ねぎ）	群馬産が中心となり、鳥取産や静岡産も主体となる入荷であった。各地とも悪天候の日が多く、降雨続きで収穫作業が進まず、産地出荷量が少ない状況が続いた。群馬産は旬を追うごとに入荷が減少し、月間では前年を大幅に下回った。全体でも旬を追うごとに減少傾向となり、月間では前年をかなり大きく下回った。 長らく続いている不足感から高値推移となり、月間では前年を大幅に上回った。
	ねぎ（青ねぎ）	徳島産を中心に、高知産、香川産や近隣の大阪産、奈良産などの入荷があった。各産地とも降雨の日が多い中でも気温高が続いたことで生育は悪くなく、比較的安定した出荷が続いたが、月間全体では前年をわずかに下回った。 悪天候の日が多かったため量販店も外食系も客足が悪く、需要はそれほど高まらない中、高値だった前年を大幅に下回った。
	レタス類	玉レタスは徳島産、兵庫産、香川産が主体となり、加工向けは九州産地も主体となった。ラップ物の出荷量が少なかった一方で、裸物は量販店での特売が多く組まれ、単価が安いことから需要が高まり、中旬以降に入荷が増加した。サニーレタスは福岡産が中心となり、生育良好で収穫量は多い中、玉レタスの安値の影響を受けてレタス全体の価格が下がったことで出荷量の調整が入り、入荷量は伸び悩んだ。リーフレタスも福岡産が中心となる入荷で、サニーレタス同様に生育良好の中でも玉レタスの安値の影響を受けて出荷調整が入り、入荷は減少した。レタス類全体では月間で前年を大幅に上回り、平年をわずかに下回った。 玉レタスの価格は、安売り販売の影響により前年を大きく下回る推移となった。安い玉レタスの販売が好調だったことから、サニーレタスやリーフレタスは発注が少なく販売に苦戦し、同じく安値推移となった。レタス類全体でも月間では前年を3割以上下回り、平年をかなりの程度下回った。
果菜類	きゅうり	宮崎産が中心となり、高知産、徳島産の入荷もあった。気温が高い日が多かったことから生育が進み、前進出荷傾向となった。燃料費の高騰を受けて価格が高い状況が続いており、引き合いが強まらなかったため積極的な集荷とならず入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年、平年ともやや下回った。 販売が苦戦し、引き合いが強まらない中で価格は旬を追うごとに下落傾向となったが高値推移となった。月間では前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。

	なす	千両系は高知産が中心となり、長なすは福岡産と熊本産が中心となる入荷であった。悪天候の日が多い中でも気温高が続き、産地出荷は前倒しとなった。燃料費の高騰による高値の影響で量販店での引き合いは弱く、降雨続きだったことで客足が悪かったことも影響し、販売には苦戦した。そのため積極的な集荷とならず入荷量は伸び悩んだが、月間全体では前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度上回った。 高値が続き販売に苦戦する中でも、価格訴求による販売で旬を追うごとに微落傾向となったが、降雨の日が多かったことにより量販店の客足は鈍く、大きな需要増とはならなかった。月間では前年、平年ともやや上回った。
	トマト	熊本産と愛知産が主体となる入荷に福岡産の入荷もあった。気温が高い状況が続いたが、悪天候の日が多く、降雨続きで日照量もかなり少なかったことから、着色が進まず産地出荷量は伸び悩んだ。熊本産は前進出荷気味で上中旬は潤沢な入荷となったが、下旬には減少した。愛知産や福岡産は全旬とも少ない状況が続いた。月間全体では前年をわずかに下回り、平年をやや上回った。 悪天候続きで量販店への客足は鈍く、消費も伸び悩んだ。月間では前年をわずかに下回り、平年をわずかに上回った。
	ピーマン	宮崎産を中心として高知産なども主体となる入荷であった。悪天候の日が多い中でも気温が高い日が続き、産地出荷は順調であった。下旬には気温低下から入荷が減少したが、月間全体では前年、平年とも大幅に上回った。 価格は、入荷量が多い中でも燃料費の高騰の影響もあり安値とはならず、月間全体では前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度上回った。
土物類	さといも	愛媛産が中心となる入荷であった。産地残量が少なく、悪天候続きで降雨の日も多く出荷が不安定であったため、全旬を通じて入荷量が少ない状況が続いた。輸入の中国産の入荷もあったが、燃料代の高騰や円安の影響に加えて現地価格が高いこともあり、国産との価格差は少なく入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。 絶対量不足から全旬を通じて高値推移となり、月間では前年、平年とも3割以上上回った。
	ばれいしょ	丸芋は鹿児島産が中心となり、北海道産の残量入荷もあった。鹿児島産は暖冬の影響により前進出荷傾向となり、産地出荷量が多く全旬を通じて潤沢な入荷となった。メークインは北海道産の残量入荷であったが、産地残量が少なく全旬とも入荷量が少ない状況が続いた。ばれいしょ全体では前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度上回った。 暖冬により量販店における冬物の消費が鈍い中、アイテム不足から新物の引き合いがあり、丸芋の価格は堅調に推移した。メークインは引き合いが弱く、品質低下品も見られたことから価格は伸び悩んだ。ばれいしょ全体では前年をやや下回り、平年を大幅に下回った。
	たまねぎ	北海道産の残量入荷と長崎産の新物入荷が主体となった。兵庫産の残量入荷もあった。北海道産は不作だった影響により産地残量が少なく、計画的な出荷となり、全旬を通じて入荷量が少ない状況が続き、月間では前年の4割以下となった。長崎産は悪天候の日が多く不安定ながらも、暖冬の影響により前進出荷傾向となり、前年より入荷は多かった。月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度下回った。 北海道産の不作から長期間続いた高値の影響が残る中、後続の長崎産がスタートしたことで徐々に落ち着きを見せ始め、価格は旬を追うごとに下落傾向となったが、月間では前年、平年とも3割以上上回った。

（執筆者：東果大阪株式会社　新開　茂樹）

（4）首都圏の需要を中心とした４月の見通し

各産地とも２月の天候が悪く、特に関東産の露地ものの秋冬作が減少する時期や、春作との端境期の有無の予想がつかないといった声が多いが、４月の春作は順調に入荷する見込みである。また、果菜類は寒暖差が激しかったことにより施設の温度管理が難しく、理想的な生育環境とはならなかった。

４月の価格は、全国的な出回り不足から平年を上回ると予想される。

根菜類

だいこんは、千葉産（東葛）の出荷は内陸の産地からとなり、若干前進気味で、３月下旬頃から始まり、４月中旬から連休にかけてがピークと予想される。出荷は５月いっぱいまでで、作付面積の減少によりやや前年を下回る可能性もある。肥大は問題なく、サイズは２L、L中心の見込みである。千葉産（ちばみどり）は、秋冬作は２週間程の前進となったが、春作も順調で３月中旬からピークとなると予想される。４月もピークが続き、少なくなるのは５月20日頃からと予想される。２Lサイズ中心で、肥大も良好である。

にんじんは、徳島産はほぼ例年と同じ３月10日前後から始まり、20日頃に出揃って４月20日頃まで横ばいで推移し、その後減りながら５月10日前後に切り上がると予想される。２月の降雨により肥大は問題なく、Lサイズ中心で、作柄は平年並みである。静岡産は、例年どおり４月初めから出荷が始まるが、現状は若干の前進傾向と予想している。ピークは４月中下旬で､連休明けには切り上がると予想される。作付けは前年の90％と減っている。Lサイズ中心で、品種は栽培が難しい「ベーターリッチ」である。

葉茎菜類

キャベツは、神奈川産は出荷がすでに始まっており、現状は３週間程前進している。ピークは３月終わりごろから４月中旬で、５月の連休時期には少なくなると予想される。３月は前年を上回る出荷となり、４月は少なくなると予想される。千葉産は３月に入り端境期となって少なめの出荷が続き、４月10日頃に増え、最大のピークは５月中下旬と予想している。４月の出荷は前進の影響によりやや少ない見込み。愛知産の現状は春ものが増えてきている。２月末の段階では冬ものは60％の進捗率で、今後４月上中旬まで「冬のぼり」などの品種は出荷できると予想している。肥大は問題なく、６玉サイズが中心と予想される。４月の出荷量は、現状までの出荷実績から判断してほぼ前年並みと予想している。

はくさいは、茨城産の春ものは、前年より２週間程度早く、３月に入ってすぐの出荷開始と予想される。秋冬ものは３月上旬まで残る見込みである。春もののピークは例年３月末から４月であるが、今年は３月中旬がピークと予想される。現状は定植中でもあり、トンネルものと露地ものの端境期があると予想される。出荷は６月中旬までの見込みである。

ほうれんそうは、岩手産は２月27日に40センチメートルの積雪があり、当初の前進はやや抑えられると予想している。出荷は一部の生産者から３月中旬後半頃から始まり、４月は特別増えることなくほぼ一定ペースで出荷されると予想される。生産者が年々減少しているため、例年を下回る出荷と予想される。群馬産は暖冬の影響により葉が黄変するなどの品質低下がみられ、収量は少なくなっている。ピークは過ぎているが、引き続き平年を下回る出荷が続くと予想している。露地ものは４月上旬まで、ハウスものは６～７月と続き、４月としては前年を下回ると予想される。

ねぎは、千葉産は３月20日頃から春ものの出荷となるが、昨年の猛暑・干ばつの影響がなく、平年並みを予想している。春ものは５月20日までで、４月20日には夏ねぎも出始めると予想される。全体の作付けはやや減少傾向だが生育は順調で、前年を上回る出荷が予想される。埼玉産は３月中下旬に目揃え会を実施した後、春ねぎの販売開始となる予定である。出荷は５月いっぱいとなるが、昨年の猛暑・干ばつの影響が残り、例年よりも少なめの出荷が予想

される。

レタスは、茨城産は平年より10日程度前進しており、端境期の時期の予想がつきにくい。３月下旬には出荷量が減り、４月には通常通り露地ものが増えると予想している。５月の連休までは出荷が多く、中旬には少なくなると予想される。兵庫産は、春に向かって暖かくなるに連れ生育スピードが増し、４月に入ってピークとなると予想される。この状態が続けば豊作傾向だが、作付けの減少もあり前年並みかやや減ると予想される。５月中旬以降は減少すると予想される。サイズはL（19玉）中心と、例年並みである。香川産は温暖な天候が続いて現状は出荷が増えてきており、肥大も良好である。３月までこのペースが続き、４月に入り減りながら推移すると予想される。４月としては例年よりも少なく、５月下旬には切り上がると予想している。長崎産は気温が高く、現状７日以上前進しており、３月の中旬に出る物が２月末頃に出始めた。そのため３月中旬以降に減ってくるが、４月に入り再び増え、５月には減ってきて、月末頃には切り上がると予想される。

果菜類

きゅうりは、宮城産が３月10日頃から収穫が始まり、４月10日過ぎに出揃い、５月のピークに向けて増えていくと予想される。順調に推移してきたが２月下旬の天候不順により、３月の出荷に多少の影響が出ると予想される。作付けは前年を下回っている。宮崎産は、例年は３月後半からピークになるが、２月の初めから天候が崩れ始めたため、３月の天候も良くなければ４月の出荷は増えにくくなると予想される。樹勢が回復しなければ、４月は前年を下回ると予想している。例年の切り上がりは６月であるが、入梅の状況次第では早めに切り上がることが予想される。群馬産は生育期間中の寒暖の差が激し過ぎたことにより、生育に時間がかかっている。曇雨天や高温など、温室の管理が非常に難しい状況である。４月の出荷は３月より増量してピークとなり、量を維持できると予想される。

なすは、高知産は２月の天候不順の影響により出荷が減少している。暖冬の影響により３月に増えて、４月は前年並みと予想している。岡山産の現状の生育は順調である。天候は暖かく、平年並みの収穫量を予想している。高齢化により作付けは前年の92%と減っている。３月15日頃から増えてピークは長く続き、例年のパターンでは４月中旬に特に多く、５月中旬に再び多くなると予想される。品種は「千両２号」である。福岡産は２月の天候不順の影響により、実が軽く細かった。３月に増えて、４月がピークとなり、６月に切り上がる見込みである。

トマトは、福岡産は４～５月がピークで、徐々に増えると予想される。全体的に順調であるが、灰色カビ病や粉シラミといった病害虫も散見される。栽培面積は年々減少し、ピーク時の70%程度である。Sサイズ中心で、６個入りパックで出荷される見込みである。このほか、中玉の「フルティカ」の出荷もあり、順調である。栃木産は暖冬により生育は順調で、３～４月と横ばいで推移し、５月がピークとなる見込み。品種は「桃太郎系」を中心に「カレン」である。４月の出荷は前年並みを予想している。熊本産の現状は着果の悪かった段の出荷となっており、３月は一定のペースでの出荷が見込まれるが、下旬から回復してきて４月中下旬からピークになると予想している。日照が少なく、湿度も高い状態が続いている。千葉産の生育は順調であり、７月まで続く越冬物の着果に問題はなく、出荷に大きなピークはないと予想される。品種は「カレン」で、４月はMサイズを中心に平年並みの出荷を予想している。

ピーマンは、宮崎産は天候に恵まれて昨年内に多く出荷された影響により、１～２月は少なめとなった。３月には回復して５月まで多いが、当面は４月中下旬がピークと予想される。カラーピーマンは３月がピークで、４月から徐々に減り始め７月上旬までと予想される。茨城産の春ものの出荷は２月に始まり、天候に恵まれ生育は順調である。２月下旬に曇雨天が続いたが、花付きは問題ない。ピークは５月の連休明けから６月までと予想される。そのほか温室ものの生育も順調で、４月としては前年を上回る出荷と予想される。

土物類

ばれいしょは、鹿児島産の早春ものは例年と同様３月上旬で終了すると予想される。春ものはやや間をおいて、３月20日過ぎに例年よりやや早いタイミングで出荷が始まる見込みである。特に気象の影響はなく生育は順調で、４月中下旬にピークとなると予想される。５月に減り始めるが、量的には前年を上回ると予想される。品種は引き続き「ニシユタカ」であり、そのほか「メークイン」もある。長崎産の春ものは例年と同様、４月下旬に出荷が出揃う見込みであり、月初には走り物の出荷があると予想される。生育は順調で、５月の連休明けがピークとなり、平年作を予想している。引き続き「ニシユタカ」を中心に「アイマサリ」なども出荷される見込みである。

たまねぎは、佐賀産は３月初めの段階では極早生の出荷となっており、ほぼ例年並みのペースである。早生に切り換わるのは４月中旬以降と予想される。現状の降雨量は平年よりも多めで、生育は順調である。兵庫産の現状は、少量ではあるが極早生の出荷が始まった。生育は順調で、東京市場への出荷は４月末頃から始まると見込まれる。３月に入っての病気の発生にも留意したい。香川産は全体の10％を占める早生が４月20日頃から始まり、メインの中早生・中晩生は５月に入ってからと予想される。作付けは前年並みである。千葉産は４月中旬から出荷が始まり、５月上中旬ピークと予想される。生育は順調である。輸入の中国産のむきたまねぎは、引き続き定量で入荷すると予想される。現地の作付けが増えて価格は安くなっている。そのほかNZ産の入荷も計画されるが、前年並みかやや少ないと予想している。船賃が下がっているため価格も下がっている。さらに、オランダからサンプルも到着しているが、実際の入荷は国内の価格次第である。

その他

ブロッコリーは、愛知産は４月にはトンネル物の春ブロッコリーが始まり、秋冬物も残るため端境のない出荷が続くと予想される。「恵麟」などの春ブロッコリーが前進しており、４～５月の連休明けまでピークが続き、５月下旬後半に急減すると予想される。茨城産の春ブロッコリーは４月末から始まり、ピークは５月で、量的には前年を下回ると予想している。生産者の高齢化により春作を止めて秋冬作だけにしていることもあるが、秋作は不作で大幅に少なかった。香川産の現状は出荷のピークを迎えているが、３月下旬から４月に入り一旦減る見込みである。５月連休前後から再びピークが来て、切り上がりは５月末頃と予想される。作付けは前年並みである。埼玉産の現状は秋冬作の終盤で、３月に入り減少して出荷の谷間に入ると予想される。３月20日頃に春作が出荷され、４月に入り本格化して中旬がピークとなり、５月の連休が始まる前頃には切り上がると予想される。

アスパラガスは、新潟産は珍しく積雪量が少なく、４月初め頃には積雪がなくなると予想され、例年５月連休明けに始まる出荷が、今年は４月最終週から始まる見込みである。ハウス物はなくすべて露地物で、株は昨夏の猛暑による病気の発生もなく、充実している。

かぼちゃは、沖縄産は昨年内から天候に恵まれて順調に推移し、３月に出荷のピークとなった。しかし、一部産地が干ばつの影響を受けている。４月は３月よりも減ってくるがまだまだ多く、５月に入りかなり少なくなると予想される。

スイートコーンは、沖縄産は４月15日頃から出荷が始まり、生育は順調で、４月25日前後をピークに、５月上旬に切り上がると予想される。品種はバイカラーの「グラビス」である。宮崎産のハウス物は４月初めから出荷が始まり、５月にはトンネル物が始まると予想される。６月には露地物も始まる予定で、作付けは前年並みかやや減である。品種は「ゴールドラッシュ」である。

そらまめは、鹿児島産は３月下旬から始まり、４月15日～20日をピークに連休前頃に切り上

がると予想される。作付けは若干減少しているが、生育は順調で、出荷は前年を上回ると予想している。

グリーンピースは、鹿児島産の出荷は２週間ほど早まり、３月下旬がピークで、４月に入り徐々に減り始めると予想される。５月の連休にはかなり少なくなると予想している。

いんげんは、沖縄産の出荷は３月18日から４月20日までがピークと予想される。その後緩やかに減少し、５月10日頃に切り上がると予想される。

えだまめは、千葉産のハウス物は４月20日から始まる予定で、高齢化により作付けは前年をやや下回っている。沖縄産は４月20日頃から東京市場で販売が始まり、５月上旬をピークに下旬までと予想される。

かんしょは、徳島産は昨年内の収穫作業が遅れたことや収量が多いことにより、現状の在庫は前年より多い。京浜市場への出荷は４月いっぱいで、関西市場には６月いっぱいの出荷を計画している。前年より土壌条件が良く、出荷は前年を上回る見込み。

にらは、高知産は昨夏の高温の影響により、例年ほど生育が良くない。このため１～２月は量的には減っていないが、この先３～４月は丈が短めで、出荷が減少すると予想される。

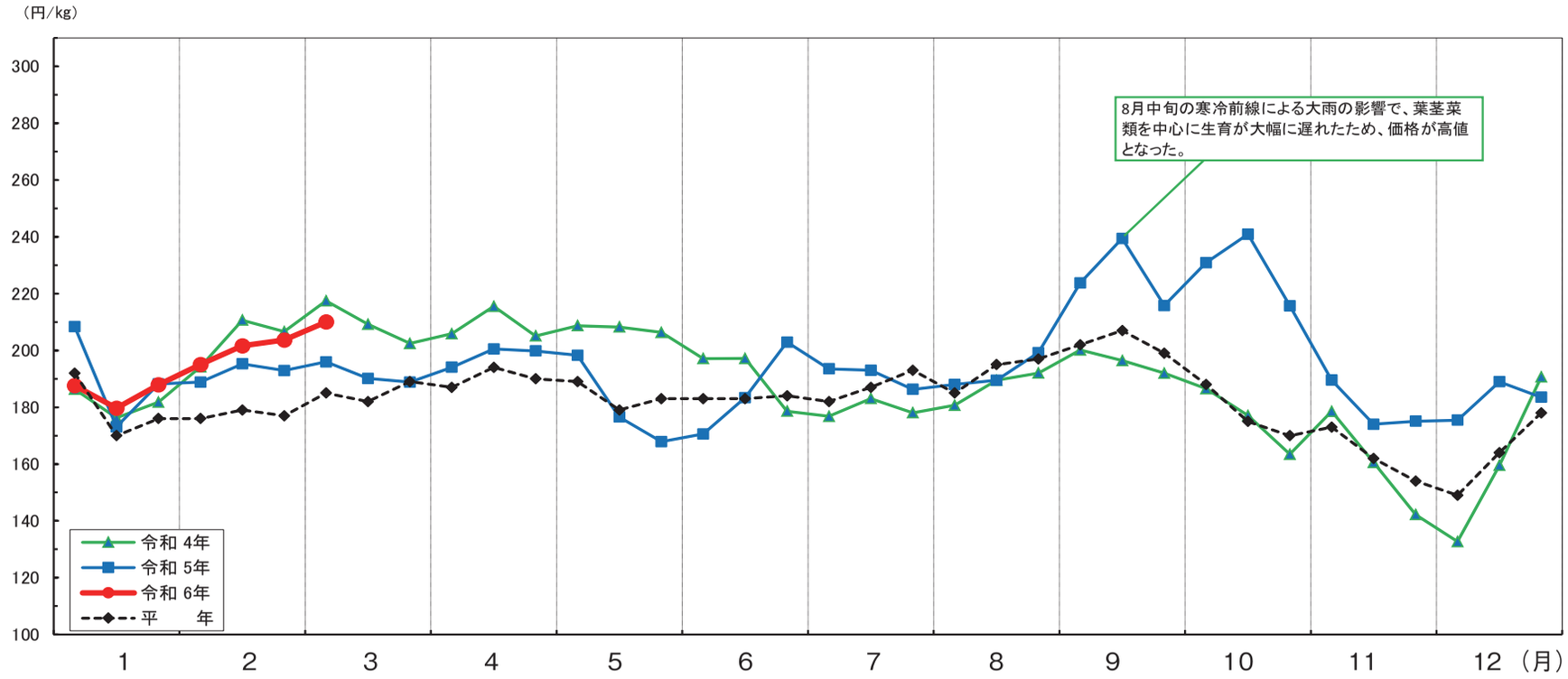
たけのこは、千葉産の出荷は例年２月20日頃からであるが、今年はやや遅れて３月初めからで、ピークは３月末頃から４月の初めで、４月末には切り上がると予想される。今年は裏年であり前年を下回る見込みである。福岡産は今年は表年（おもてどし）であるが、前年の秋口に降雨が少なかったことや、高齢化により多く収穫できないと予想される。雨が多くなれば３月30日頃から出荷のピークが始まり、例年通りであれば４月10日頃までと予想される。終盤は４月25日頃であるが、缶詰業界からの引き合いが強まると市場出荷は早く切り上がると予想される。

メロンは、茨城産の「オトメメロン」の出荷は４月上旬に始まり、５月上旬までと予想される。「アンデスメロン」は４月20日前後から始まり、５月中下旬にピークとなり、６月上旬に切り上がると予想される。「クインシーメロン」は早い物が４月下旬から始まり、多くなるのは５月中旬で、６月中旬には切り上がると予想される。作付けは前年並みだが、20年以上前のピーク時から比べると、部会の人数が三分の一まで減っている。またセンサー選果のため、味のばらつきはなく、糖度も高い。

こだますいかは、茨城産は３月１日から出荷が始まり、ピークは５月下旬から６月までと予想される。２月後半の天候不順により、４月中旬の出荷物に影響が出て、少なくなると予想している。つるの伸長は非常に良好であることから、そのほかの時期は着実に出荷できると予想している。

（執筆者：千葉県立農業大学校
講師　加藤　宏一）

（参考）　指定野菜の卸売価格の推移（東京都中央卸売市場）

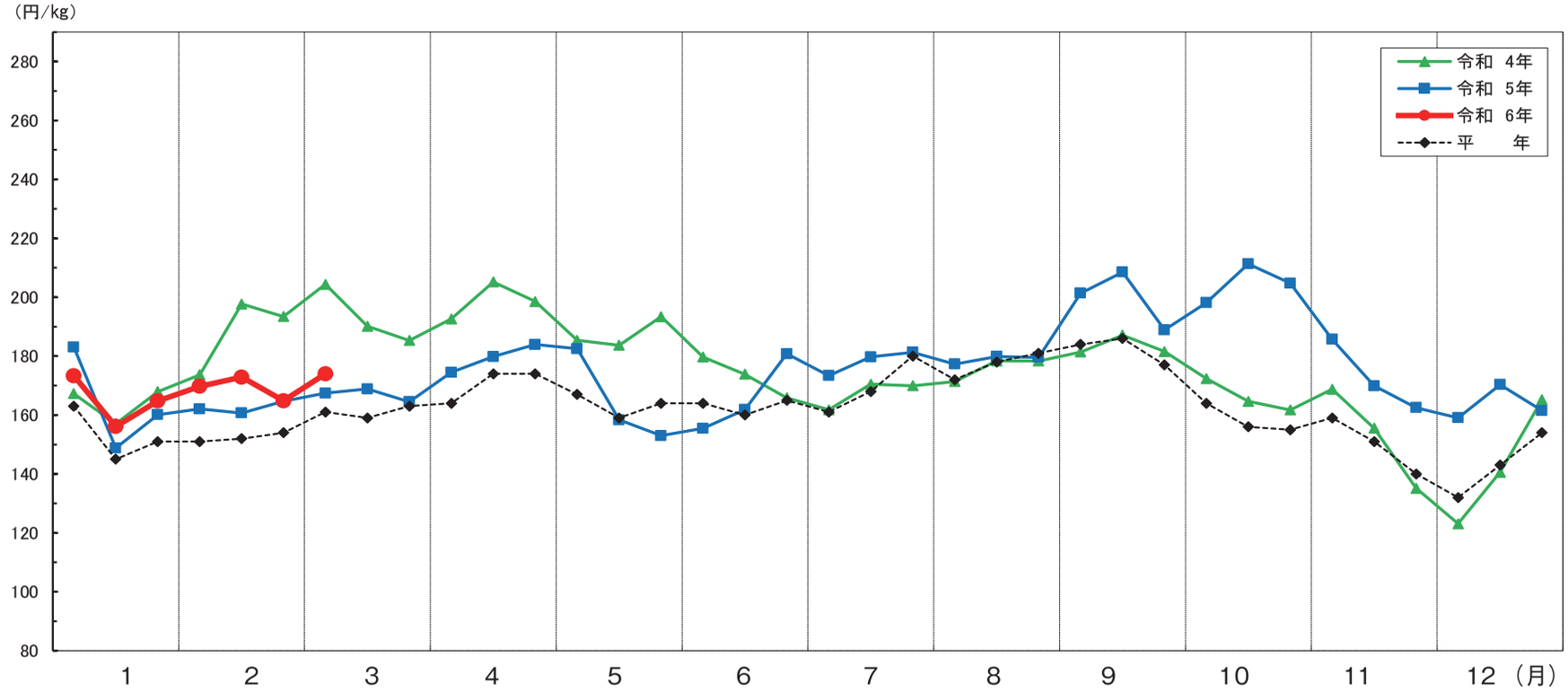


（単位：円／kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和４年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	187	177	163	179	161	142	133	160	191
令和５年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	175	189	184
令和６年	188	180	188	195	202	204	210																													
平　　年	209	182	182	188	190	185	192	182	188	181	188	183	181	177	181	179	177	177	177	186	199	188	200	199	201	202	196	185	166	166	172	159	148	143	156	177

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（平成30年～令和４年）の旬別価格の平均値である。
注２：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の４市場のデータである。

（参考）　指定野菜の卸売価格の推移（大阪市中央卸売市場）



（単位：円／ kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161
令和６年	173	156	165	170	173	165	174																													
平　　年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（平成30年～令和４年）の旬別価格の平均値である。
注２：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。